

巻 頭 言

『コロナ禍での生涯学習とこれからの展開への期待』

鹿児島大学高等教育研究開発センター 前生涯学習部門長 寺岡 行雄
農学部長・教授

令和2（2020）年1月に中国での原因不明の肺炎発生に始まった新型コロナウイルス感染症により、我々、いや世界中の人々の生活は一変した。もちろん鹿児島大学も例外ではなく、令和2年度（2020年4月）からの大学の教育研究活動も大きな影響を受けた。大学行事の縮小や中止、講義室収容人数の制限、遠隔授業の実施、課外活動の制限、県外への移動の制限が始まった。遠隔授業のためにZoomの活用が始まり、それまで一部の先生方の利用に留まっていた教育支援システムであるManabaをすべての教員が利用せざるを得なくなった。学生たちは自宅でインターネットに接続できる環境なのか、PCは持っているのかなど想定していなかった事項の確認作業や手当てに追われる日々であった。

この3年間で飛び交ったキーワードのいくつかを挙げると、濃厚接触者、三密の回避、マスク着用、うがいと手洗い、外出自粛、非常事態宣言、PCR検査、ワクチン接種、県外往来禁止、飲食店の営業自粛等々であり、テレビニュースでも感染者数を天気予報のように連日報道していた。未知のウイルスであり、世界中で人類の活動レベルが低下した期間であった。

コロナ禍は鹿児島大学の生涯学習事業にも大きな影響があった。これまで年間1,000名近い受講申し込みをいただいていた公開授業も、令和2年度前期は中止せざるを得なかった。また、公開講座も履修証明プログラムも延期や遠隔授業での実施へ変更する必要があった。公開授業は令和2年度後期からスクーリングをしない遠隔授業のみで再開したが、公開授業の受講者は比較的年齢が高く、インターネットを介しての受講には多くの困難があったことと思う。受講者数が1割ほどに減ったものの、それでも受講いただいた方々に感謝している。今回取りまとめられた「かごしま生涯学習研究-大学と地域」の第4号では、コロナ禍での鹿児島大学の生涯学習の活動についてしっかりと記録されており、将来の不測事態の際に貴重な資料となることであろう。「それでも学び続ける」は大学生だけでなく、広い年齢層への重要なメッセージになると思われる。

「それでも学び続ける」機会づくりに奔走したのは、大学だけではない。地域報告にみられるように、県、市町村、民間の立場で学習者の視点に立ち、できること、やるべきことを各々の立場で考え、他の組織や団体とも連携もしながら努力を重ねていた。

まだ総括するには早いかもしれないが、コロナ禍が私たちの生活にもたらしたことは、インターネットを通じてコミュニケーションができるということの実感と能力が身についたこと。そして、コロナ感染者への差別をなくすとか、例えば感染による授業の欠席への寛容な対応がもたらした他者の事情への配慮の大切さが認識されたことではないかと思う。

生涯学習部門長の任を解かれた令和5年4月を迎え、私の講義を二人の社会人の方が公開授業で受講された。また、農学部では3つの履修証明プログラムが始まり、約80の方が修了される。コロナ禍を経ての新しい学びが鹿児島大学で展開されることを期待している。